「うらおそいのおもろ」の散歩道

浦添市「おもろの碑」めぐりガイドブック

「うらおそいのおもろ」の散歩道
浦添市教育委員会・平成七年三月三日初版
平成一三年三月改訂

問い合わせは文化課へ　〒901-2501浦添市安波茶1-1-1
電　話　098-876-1234
FAX　098-878-1487

目　次

浦添市に「おもろの碑」をたてる……1頁
神への言葉――おもろ……3頁
おもろの読みかた……5頁
「おもろの碑」おすすめ散歩道
舜天・英祖・察度の王朝の跡をたずねる……7頁
尚寧王の道を歩く……9頁
むらの中のおもろの碑……11頁
九つの「おもろの碑」
神酒が満ちあふれる豊かな浦添よ……（運動公園メインゲート向いの碑）13頁
黄金寄り集まる根の国浦添……（仲間交番前の碑）15頁
親富祖の大屋子が貢ぎ物をささげる……（屋富祖公民館の碑）17頁
城間の長老が神女たちと……（字城間・泉小公園の碑）19頁
仲西のすぐれた真人……（仲西公民館の碑）21頁
英祖王は夏は神酒、冬は御酒をもる……（伊祖公園の碑）23頁
宝庫のとびらを開いた察度王……（牧港漁港の碑）25頁
国中に鳴り響く沢岻太郎名付け……（字沢岻・めじろ公園の碑）27頁
浦添ぐすくの王をたたえる……（浦西中学校正門前の碑）29頁
もっとおもろを知りたい方に（手ごろな参考書）……31頁

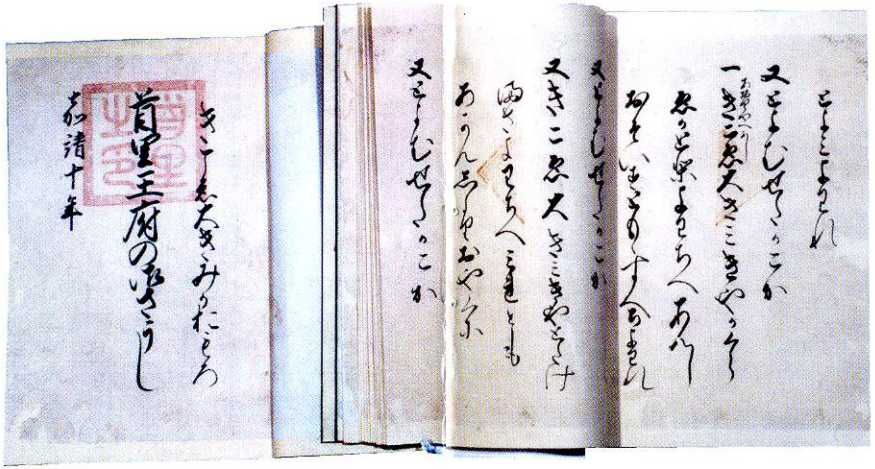
初期の海外交易港といわれている牧港

浦添市に「おもろの碑」をたてる

今から六〇〇年前、浦添は琉球王国の王宮がある都として栄えていました。また、都が首里に移ったあとも、浦添グスクに居をかまえていた尚寧が王位についたこともあります。こうした琉球王国の中心であった時代の浦添は「うらおそい」とよばれていました。「浦うらを襲う（治める）土地」という意味です。

『おもろさうし』という古い本には、うらおそいの時代、首里の時代に謡（うた）われていた「おもろ」が記録されています。おもろが謡われた時代は、琉球王国を建国し、アジア諸国との交易を展開する、はつらつとした時代でした。

浦添市教育委員会では、『おもろさうし』のなかから浦添に関係するおもろをえらび、これを現在活躍している書家に書いてもらい、石にきざんで、おもろにゆかりのある土地に建てることにしました。昭和六三年から平成七年にかけて九基の「おもろの碑」を建てました。この石碑のおもろをとおして、先祖の心にふれ、また浦添の歴史をふり返り、そして、これからの浦添市を考えるきっかけになればと思います。



神への言葉――おもろ

「おもろ」は、神にささげる歌、「神への言葉」だと考えられています。おもろは、沖縄と奄美の村の祭りや間切（まぎり）の祭り、王府の祭りの時に謡われていました。土地をほめ、領主をたたえ、豊かなみのりを願い、航海の安全を祈っています。また歴史上の人物を賛美し、戦さのことも謡っています。

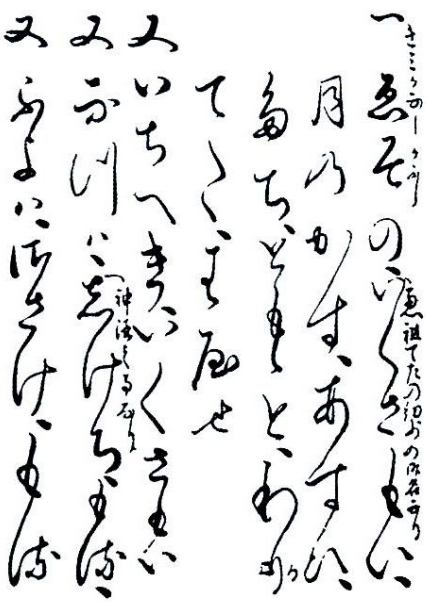
首里王府は、謡いつがれてきたおもろを一五三一年から一六二三年にかけて記録し、二二巻の『おもろさうし』という本にまとめました。

いつからおもろが謡われてきたのかはっきりしませんが、一三世紀の「えぞのいくさもい」（英祖王）を謡ったおもろが一番古く、一七世紀はじめの尚寧王妃がよんだと伝えられているおもろが一番新しいと言われています。どちらも浦添とかかわりのあるおもろです。

おもろの読みかた

おもろには、はじめに「一」とあり、さらに「又」とあります。これは一種の音楽記号で、「一」ははじまりの意味、「又」は音楽上のくり返しを意味する記号です。おもろは、こうした音楽的なくり返しだけでなく、歌詞のなかでもおなじ意味の言葉、おなじ句をくり返してリズム感をだしています。

左のおもろは、仲吉本とよばれている『おもろさうし』の写本です。琉球語で謡(うた)われてきたおもろを、漢字まじりのひらがな（五十音）で書き表しています。そのため、実際の読み方は、ひらがなのとおりの読みにはならないところもありますが、むつかしいことは気にせず、そのまま読んでみましょう。



きみかなしかふし

一　ゑその、いくさもい、
　　月のかす、あすひ、たち、
　　ともゝと、わかてた、はやせ
又　いちへき、いくさもい
又　なつは、しけち、もる、
又　ふよは、御さけ、もる

「おもろの碑」おすすめ散歩道

市内のあちこちにある九つの「おもろの碑」をたずね歩くために、おすすめコースを作ってみました。もよりのバス停で降りて、「おもろの碑」をたずねます。とちゅう、浦添の文化財や自然にもふれながら散策しましょう。コースの終わりももちろんバス停です。

舜天・英祖・察度の王朝の跡をたずねる

「運動公園メインゲート向いの碑」―「仲間交番前の碑」―「伊祖公園の碑」―「牧港漁港の碑」をめぐるコースです。琉球王国の最初の王朝を開いたという舜天王ゆかりのテラブのガマ、英祖王の居城といわれる伊祖グスク、英祖王の父の墓（伊祖の高御墓（たかおはか））、察度王の居城である浦添グスクをたずねます。とくに、当山の石畳道と石橋から牧港川沿いをとおり伊祖の高御墓にいたるコースは自然と文化財を楽しめる散歩道です。

尚寧王（しょうねい）の道を歩く

「字沢岻・めじろ公園の碑」―「仲間交番前の碑」―「浦西中学校正門前の碑」のコースで、尚寧王が一五九七年に整備した首里から浦添グスクへの古道をとおります。尚寧王は、浦添から王位にのぼるという栄光と、薩摩の琉球侵攻で捕虜となる屈辱を味わった悲劇の王です。

このコースには、妖怪を退治するために経石をうめたという経塚、みごとな石づくりの安波茶橋、王様が赤い皿で水をのんだと伝えられる赤皿ガー、尚寧王整備の石畳道、尚寧王が生まれ育った浦添城跡、尚寧王の墓（ようどれ）などがあります。このほか、毎年元日に国王に水をささげた沢岻樋川（ヒージャー）があります。

むらの中のおもろの碑

「仲西公民館の碑」―「屋富祖公民館の碑」―「字城間・泉小公園の碑」―「伊祖公園の碑」のコースです。仲西・宮城・屋富祖・伊祖などおもろにも謡（うた）われる浦添の古いムラを歩きます。ムラの御願所・カー（井戸）などをのぞきながら行きましょう。

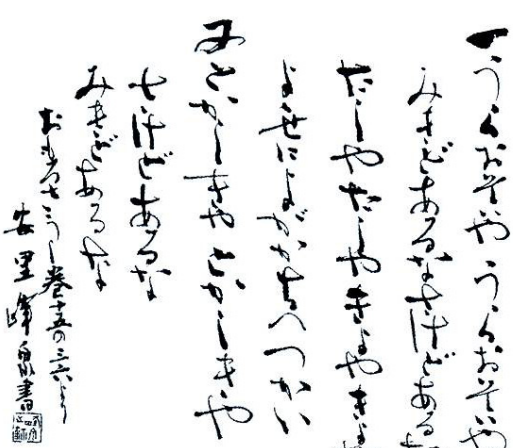
神酒が満ちあふれる豊かな浦添よ

運動公園メインゲート向いの碑

浦添は酒が満ちあふれている豊かな土地だ。その豊かさに感謝して酒宴を開こうではないかという内容です。

「うらおそいや うらおそいや、みきどあるな みきどあるな」と二句ずつくり返してリズミカルにし、うきうきした気分をだしています。「みき」や「さけ」があることは豊かな土地であることを意味しています。また、「多謝、多謝」と琉球語とは不つりあいな漢語をまじえながら、おもしろく浦添の土地をほめ称えています。

平成七年建立・揮毫は安里牧子先生



巻 五の三六

一 うらおそいや うらおそいや
みきどあるな さけどあるな
たしや たしや
きよや きよや
よゝせによがかちへ つかい
又 とかしきや とかしきや
さけどあるな みきどあるな

浦添は 浦添には
神酒が有る 酒が有る
多謝 多謝
今日は 今日は
世寄せによの方を 招き
渡嘉敷は 渡嘉敷には
酒が有る 神酒が有る

黄金寄り集まる根の国浦添

仲間交番前の碑

浦添は、黄金が寄り集まり、永久に黄金が積もるほど繁栄がつづいている、これほどの土地は浦添にしかみられない、という内容です。「もゝと」は百年で、永遠の意味。「ねくに」と「まくに」は国の中心を意味するほめ言葉。

「とかしき」は浦添の古い地名で、国の中心地になってから浦々を治めるという意味の「うらおそい」（浦＝村襲い）に変わり、その後「浦添」に変化してきたと考えられています。

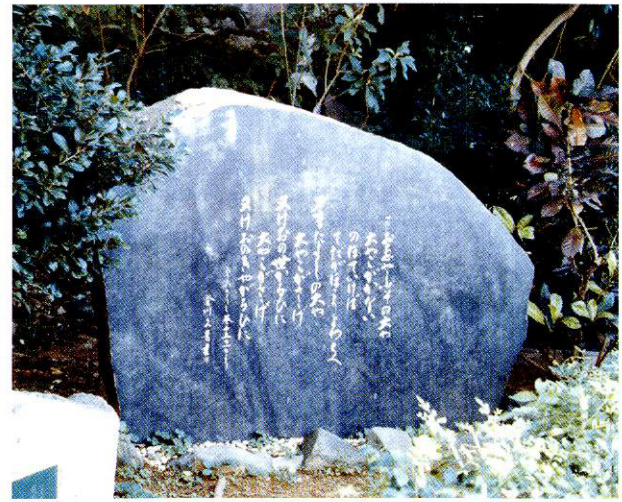
平成五年建立・揮毫は宮城久一先生

一　うらおそいのね國
もゝと つも こがね
うらおそいど ありよる
又　とかしきの まくに

おもろさうし　巻十五の二八より
潭洞書

巻一五の二八

一　うらおそいのね國　　浦添の根国
　もゝと　つも　こがね　　永遠に積もる黄金
　うらおそいど　ありよる　　浦添にこそ有る
又　とかしきのまくに　　渡嘉敷の真国



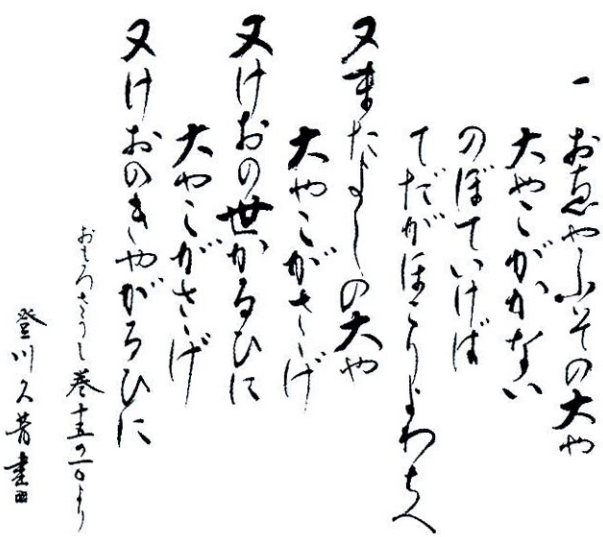
親富祖の大屋子が貢ぎ物をささげる

屋富祖公民館の碑

親富祖＝又吉の大親（大屋子）という村の役人が、王城の京の内に出むいて貢ぎ物をささげるようすを謡（うた）ったおもろです。

親富祖村は後に屋富祖村に合併されたと考えられています。一七一三年に編集された『琉球国由来記』には、親富祖村の拝所として「親富祖殿」があります。また屋富祖村の拝所には、「屋富祖殿」、「ニヨケン森」が見えます。

平成三年建立・揮毫は登川正雄先生



巻一五の十

おゑやふその大や　親富祖の大親
大やこがかない　大屋子の貢租
　のぼていけば　登って行くと
　てだがほこりよわちへ　てだが誇り給いて
又　またよしの大や　又吉の大親
　大やこがさゝげ　大屋子の捧物
又　けおの世かるひに　今日のよかる日に
　大やこがさゝげ　大屋子の捧物
又　けおのきやがるひに　今日の輝ける日（吉日）に

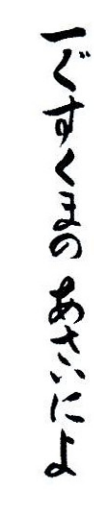
城間の長老が神女たちと

字城間・泉小公園の碑

城間、又吉の長老様がいらっしゃる広庭（ひろにわ）に、神女たちよ天降りして祭りをしなさい、というおもろです。古琉球のムラには男性の長老がおり、神々に祈る役割は神女たちが受け持っていました。神祭りをする広庭で、神女たちが祭りをするようすを謡（うた）っています。

又吉は、城間のとなりにあったとみられる古いムラの名前です。

平成四年建立・揮毫は吉峯弘祐先生



巻九の八

一　ぐすくまの　あさいによ　　城間の長老様
　　あさいによ　ひろみやに　　長老様の広庭に
　　おれなおせ　　降り直せ
　　かみた　かみ　　神達　神（女）よ
又　またよしの　あさいによ　　又吉の長老様

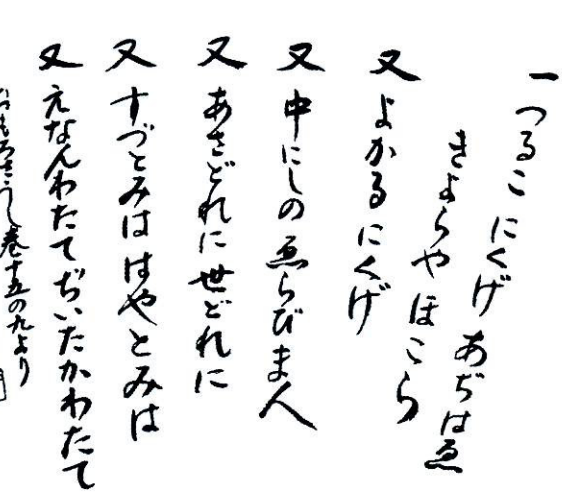
仲西のすぐれた真人

仲西公民館の碑

仲西のすぐれた真人の「にくげ按司栄え」が、朝夕に船足の速い鈴富・早富（船名）をあやつって、サンゴ礁の干瀬（ひせ）（リーフ）の多い難所の伊那武（いなん）＝自謝嘉（ししゃか）を渡る様子を歌ったおもろです。

「ゑなん（伊那武）」は、小湾の沖にある伊奈武干瀬と考えられています。「ゑらび真人」は選りすぐった立派なお方の意味です。

平成二年建立・揮毫は糸洲朝薫先生



巻一五の九

一　つるこ　にくげ　あぢはゑ　　つるこにくげ按司栄え
　　きよらや　ほこら　　美しく誇らん
又　よかる　にくげ　（あぢはゑ）　　よかるにくげ（按司栄え）
又　中にしの　ゑらびま人　　仲西のすぐれた真人
又　あさどれに　世どれに　　朝凪れに　夕凪れに
又　すづとみは　はやとみは　　鈴富は　早富は
又　ゑなんわたて　ぢいだかわたて　　伊那武を渡って　自謝嘉を渡って

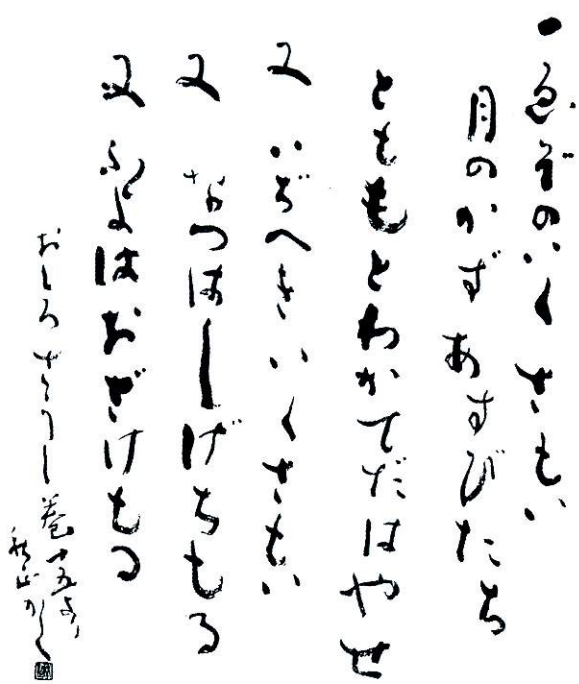
英祖王は夏は神酒、冬は御酒をもる

伊祖公園の碑

「ゑぞのいくさもい」は英祖王の童名といわれています。英祖王は、一二六〇年に中山王となり、英祖王統を開いた人です。英祖王は「ゑぞのてだ」（伊祖の太陽）と称えられたすぐれた王で、その居城が伊祖グスクだといわれています。

このおもろは、「ゑぞのいくさもい」が夏はしげち（酒）、冬は御酒と毎月のように神遊びを催している。いつまでも、若てだ（英祖王）様が栄えるようにという内容です。

昭和六三年建立・揮毫は我喜屋秋正先生



巻一五の一八

一 ゑぞのいくさもい
　月のかず　あすびたち
　ともゝと　わかてだ　はやせ
又 いぢへきいくさもい
又 なつは　しげち　もる
又 ふよは　御ざけ　もる

伊祖のイクサ思い
　月毎に　遊びを催し
　とこしえに若てだ栄やせ
すぐれたイクサ思い
夏は神酒を盛る
冬は御酒を盛る

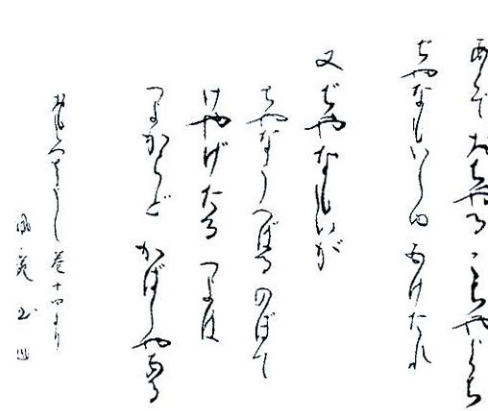
宝庫のとびらを開いた察度王

牧港漁港の碑

「ぢやなもい」は察度王の童名です。このおもろは、莫大な利益をもたらす中国との進貢貿易に成功した察度王をほめたたえたものです。このような偉業をなしとげた「じやなもい」は誰が生んだ子か、こんなにも美しい、こんなにも見たいものだと謡(うた)いあげています。

察度王の使者は、中国泉州から皇帝のいる南京まで進貢の旅をしました。この石碑は、泉州市と浦添市との友好都市締結を記念して、泉州市が中国産の青石（輝緑岩）に字を刻んで寄贈したものです。

昭和六三年建立・揮毫は砂川米市先生



巻一四の一

一　ぢやなもひや　　ぢやなもひ（察度王）は
　　たがなちやる　くわが　　誰が生みたる子か
　　こがきよらさ　　こんなにも美しく
　　こがみぼしや　あるよな　　こんなにも見たくあるよ
又　もゝぢやらの　　百按司の
　　あぐで　おちやる　　望んで置いたる
　　こちやぐら　　宝庫を
　　ぢやなもいしゆ　あけたれ　　ぢやなもいこそ開けたり
又　ぢやなもいが　　じやなもいが
　　ぢやなうへばる　のぼて　　謝名上原に登って
　　けやげたるつよは　　蹴上げたる露は
　　つよからど　かばしやある　　露さえも　芳しい

国中に鳴り響く沢岻太郎名付け

字沢岻・めじろ公園の碑

沢岻親方盛里は、尚清王（中城按司まにきよたる）の名付け親だったことから「たくしたらなづけ」（沢岻太郎名付け）と呼ばれていました。この名付けの名声は国、郡、浦々まで鳴り響いているという内容です。

尚清王は、一五二七年に王位についています。浦添グスクにいた浦添王子尚維衡（尚寧王の曾祖父）とは異母兄弟です。尚清王の時代は、奄美大島への出兵や、倭寇（海賊）に備えて那覇港防備の砦・やらざ杜グスクを造営したり、首里グスクの城壁を拡張するなど緊迫した時代でした。

昭和六三年建立・揮毫は豊平峰雲先生

巻一五の八

一　たくし　たらなつけ　　沢岻太郎名付け

國　こおり　うらのかず　国郡浦のすべて

とよまへ　つかい　　鳴響まして　招待

又　よかる　たらなつけ　　よかる太郎名付け

浦添ぐすくの王をたたえる

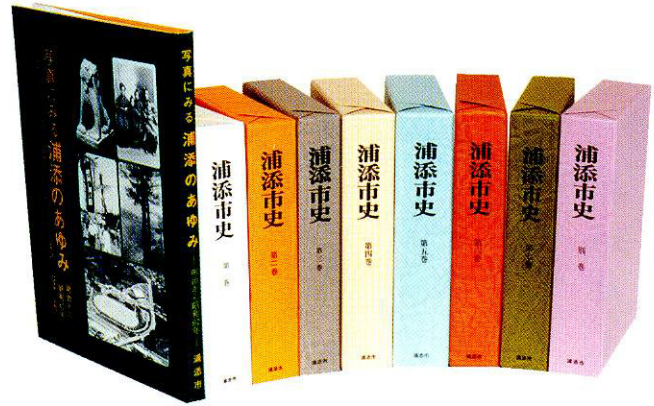
浦西中学校正門前の碑

名高い按司襲い様が、浦添ぐすくの「世の頂」におられるので太陽（神）も喜んでいらっしゃるという意味のおもろです。「あぢおそい」は按司（領主）を襲う（治める）者、ここでは浦添グスクにいる王のことです。「世の頂（つぢ）」は浦添ぐすくの中にある聖地で、うらそえの美称としてもつかわれています。「てだ」は太陽の意味ですが、王や按司も「てだ」とよばれ、尊敬されていました。

平成六年建立・揮毫は大城稔先生

巻一五の二五

一　きこゑあぢおそいや　聞え按司様が
　うらおそいに　ちよわれば　浦添に居給えば
　てだが　ほこりよわちへ　太陽が誇り給う
又　とよむあぢおそいや　有名な按司様が
　世のつぢに　ちよわれば　世の頂に居給えば



もっとおもろを知りたい方に

（手頃な参考書）

全二二巻の『おもろさうし』には、重複もありますが全部で一、五五四首のおもろが収められています。そのうち浦添関係のおもろは巻一五の「うらおそい、きたたん、よんたむざのおもろ」を中心に六七首あります。このガイドブックでは、「おもろの碑」に刻まれた九つのおもろを紹介しました。うらおそいのおもろについてもっと知りたい方には、

『浦添市史』第二巻（一五〇〇円）・第三巻（二〇〇〇円）をおすすめします。浦添市立図書館・浦添市美術館で販売しています。また、おもろについてさらに詳しく知りたい方には、次の参考書が手ごろです。

『おもろさうし精華抄』
（おもろ研究会編、ひるぎ社発行）

『日本思想史体系18おもろさうし』
（外間守善・西郷信綱校注、岩波書店）